

# 鉄鉄コンクリート鉄道高架橋の軽量化

国有鉄道構造物設計事務所

技師 深谷俊明

## 1. まえがき

国鉄における高架橋は、各種の構造型式の変遷を経てラーメン構造のものが多く採用されている。このラーメン構造の高架橋は、設計方法の進歩発達により漸次軽量化されているが、なお軽量化の余地があるので、ここに簡単に検討することとした。

## 2. 国鉄における高架橋の建設経過

国鉄における高架橋は、図-1および表-1に示すように、東京・神戸・大阪・名古屋・横浜・等の市街地において発達し、局部的には地形の関係で佐世保・下関の一部にも建設され、単線換算延長は表-2が示すように100kmにも及んでいる。

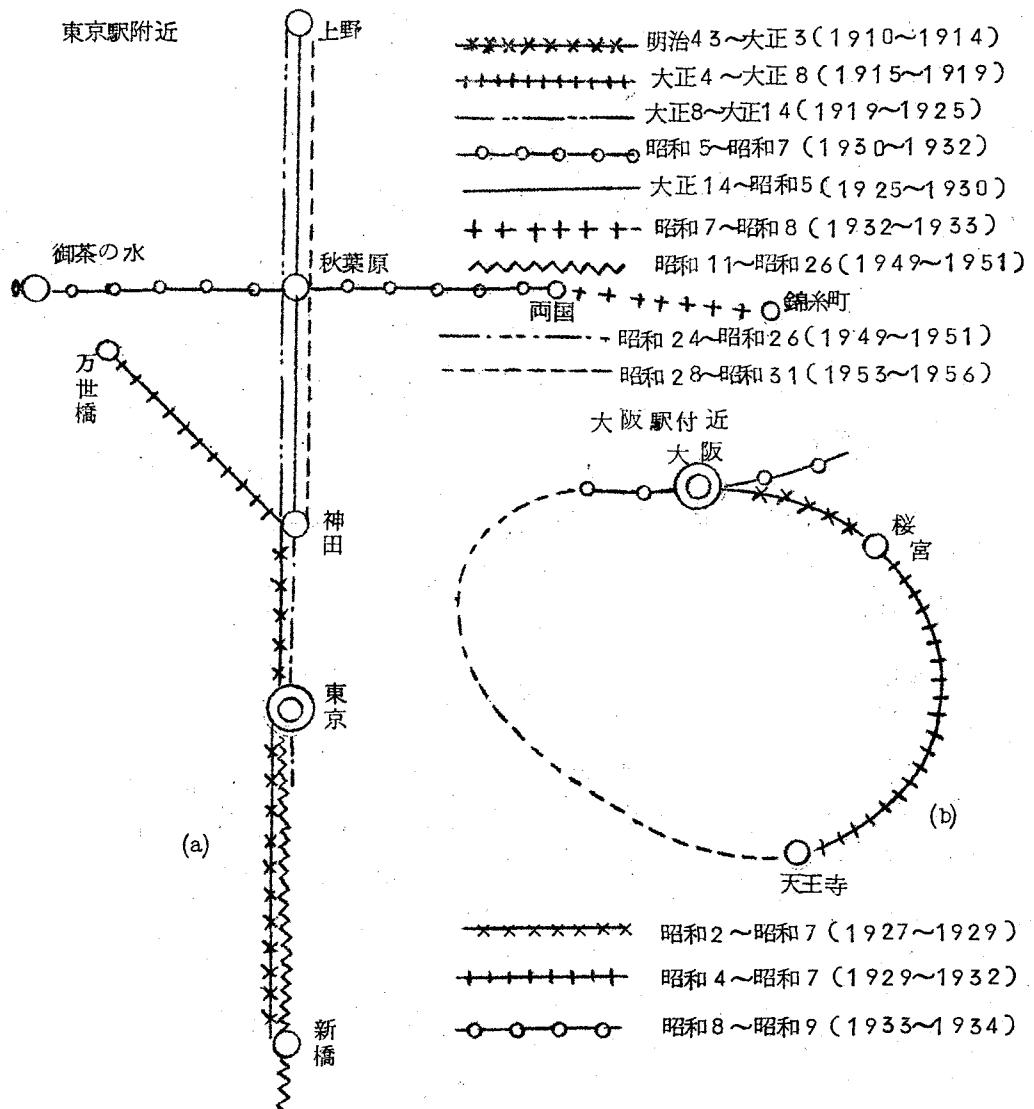


図 - 1

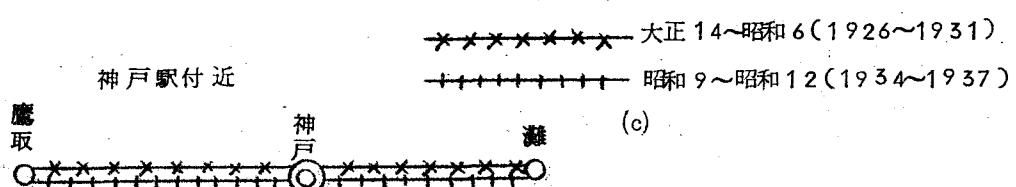


表 一 1

年 代	国鉄における 設計示方書	土木学会標準 示 方 書	示方書に示されている許容応力度		設計に使用された許容応力度		高架橋の建設期間	備 考
			$\sigma_{ca}$ kg/cm <sup>2</sup>	$\sigma_{sa}$ kg/cm <sup>2</sup>	$\sigma_{ca}$ kg/cm <sup>2</sup>	$\sigma_{sa}$ kg/cm <sup>2</sup>		
1914 (大正3年)	達684号 鉄筋コンクリート 橋梁設計心得		42 (600# / 口")	1,056 (150,000# / 口")	42 (600# / 口")	1,056 (150,000# / 口")		
1931 (昭和6年)	土木学会標準 示方書		65	1,200	55	1,120 (160,000# / 口")	神田 - 万世橋 上野 - 神田	関東震災
1936 (昭和11年)	標準示方書第 1次改訂		65	1,200	60	1,200	上野 - 神田 御茶の水 - 西園 東京 - 浜松町 東京 - 神田 上野 - 神田	
1940 (昭和15年)	標準示方書第 2次改訂		70	1,200	70	1,300	西園 - 錦糸町 両国 - 錦糸町 横浜駅附近 大阪 - 上淀 大阪 - 横濱 桜宮 - 天王寺 名古屋駅附近 佐世保	第2次世界大戦
1949 (昭和24年)	標準示方書第 3次改訂		70	1,200	55	1,400 (SS39, SS41) (SS49, SS50)	東京 - 浜松町 東京 - 神田 上野 - 神田	* , **のほかに、つぎのように規定 されている。 $\sigma_c=45$ にたいし $\{\sigma_s=1200 (SS39, SS41)$ $\{\sigma_s=1200 (SS49, SS50)$ $\sigma_c=50$ にたいし $\{\sigma_s=1300 (SS39, SS41)$ $\{\sigma_s=1400 (SS49, SS50)$ $\sigma_c=65$ にたいし $\{\sigma_s=1300 (SS39, SS41)$ $\{\sigma_s=1500 (SS49, SS50)$
1955 1956 (昭和31年)	土木構造物の 設計基準案	標準示方書第 4次改訂	80*	1,400 (SS39, SS41) (SS49, SS50)	65	1,400	名古屋中央線 仙台貨物線 横浜根岸線	
			$\sigma_{28}/3$	80	80	1,600		



表 - 2

年 次	建設延長( m )	延長合計( m )
1915(大正4年)まで	8,114	8,114
1916~1925(大正5年~大正14年)	11,112	19,226
1926~1935(大正15年~昭和10年)	59,154	78,380
1936~1945(昭和11年~昭和20年)	20,188	98,568
1946~1955(昭和21年~昭和30年)	3,913	102,481
1956~1957(昭和31年~昭和32年)	544	103,025

国鉄における最初の高架橋は、東京-新橋間のレンガアーチの高架橋であるが(図-2参照)、その後東京-万世橋間に鉄筋コンクリートアーチでレンガ側壁、鉄筋コンクリート単純版と壁式橋脚との組合せ(図-3参照)、鉄筋コンクリート連続版と壁式橋脚との組合せ、など各種型式の高架橋がこの区間に建設され、ついで神田-上野間には単純版とラーメン橋脚との組合せが、また神戸市街線(山側)には連続版ラーメン橋脚とを組合せたものが建設された。これらの過程を経て神戸市街線(海側)、大阪城東線(図-4参照)、大阪-上淀間、神田-上野間に相ついでラーメン構造の高架橋が建設され、今日では、このラーメン構造の高架橋が高架型式の大部分を占めるようになった(図-5、6参照)。しかし、配線状態、地盤支持力、高架下空間の利用、等に応じて、フラットスラブ構造、壁式構造、合成桁・PC桁を利用したものの、等の例も相当見られる。

東京新橋間繰瓦アーチ高架橋

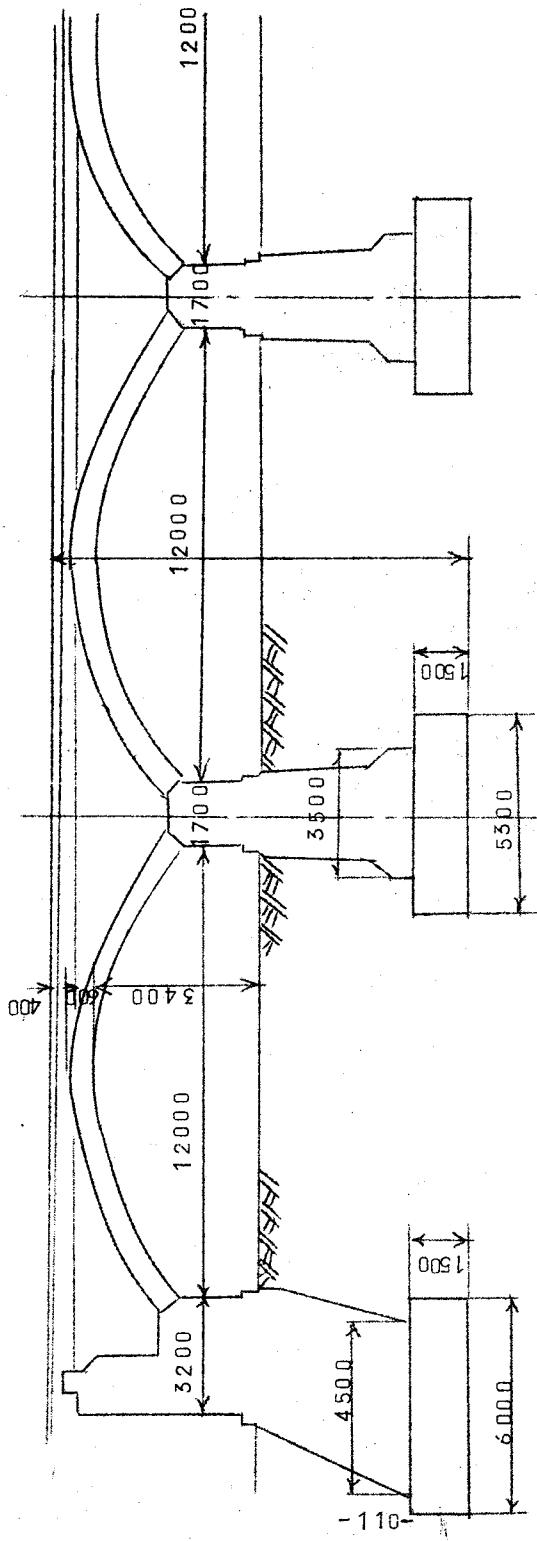


図-2

東京 - 萬世橋間スラブ式高架橋

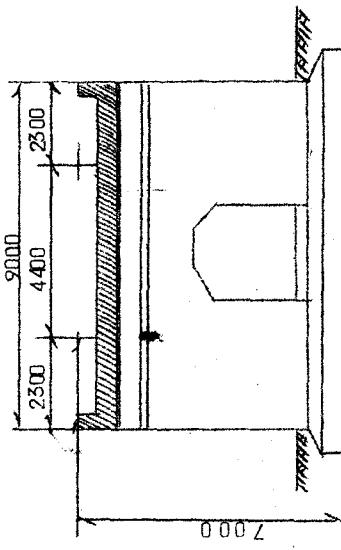
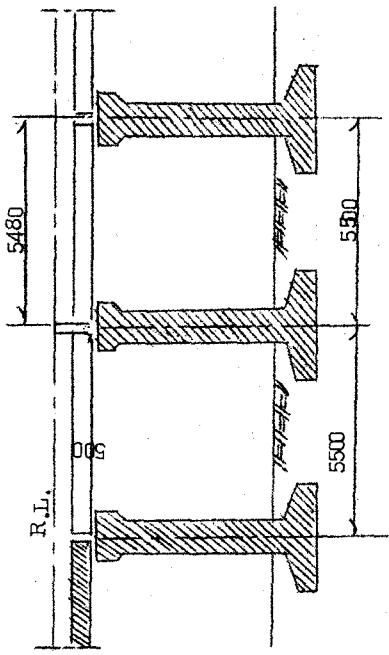
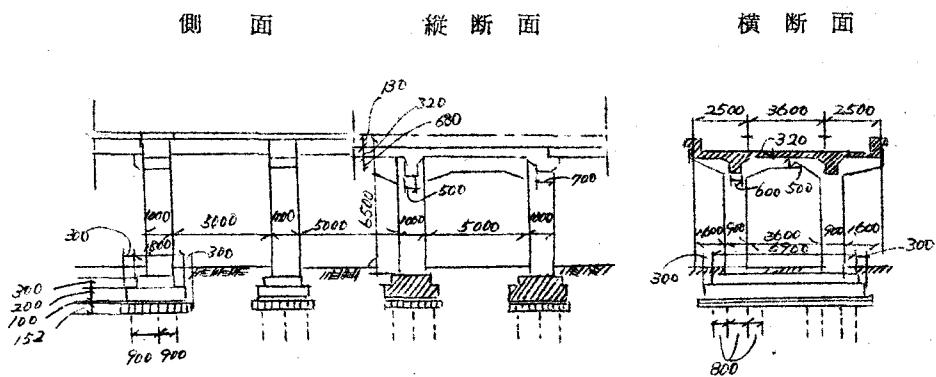


図 - 3

## 城東線 2 柱 3 徑間標準型高架橋



四 - 4

## 有楽町新橋間外濠添高架橋

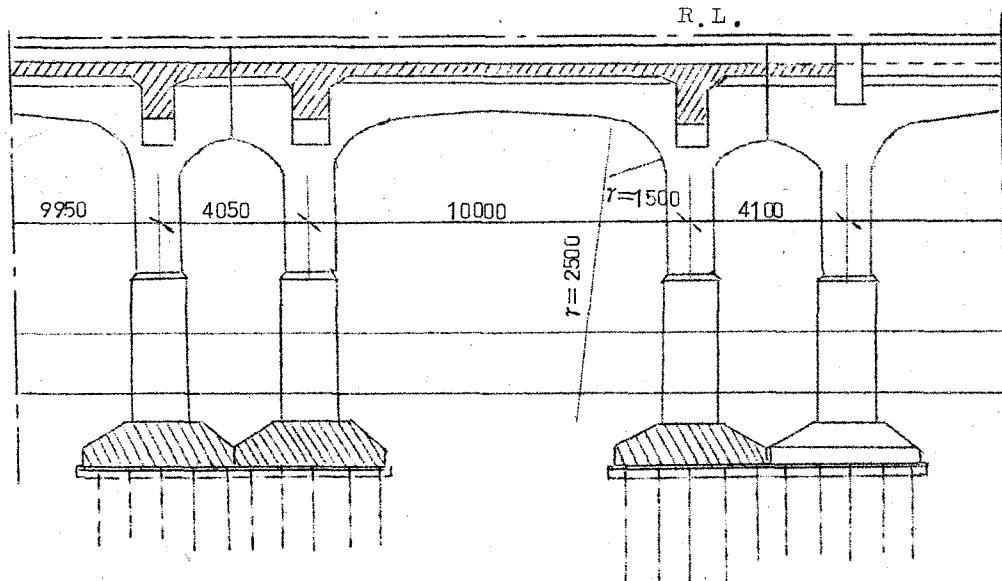


図 - 5

中央線名古屋千種間 2 線 2 柱式高架橋

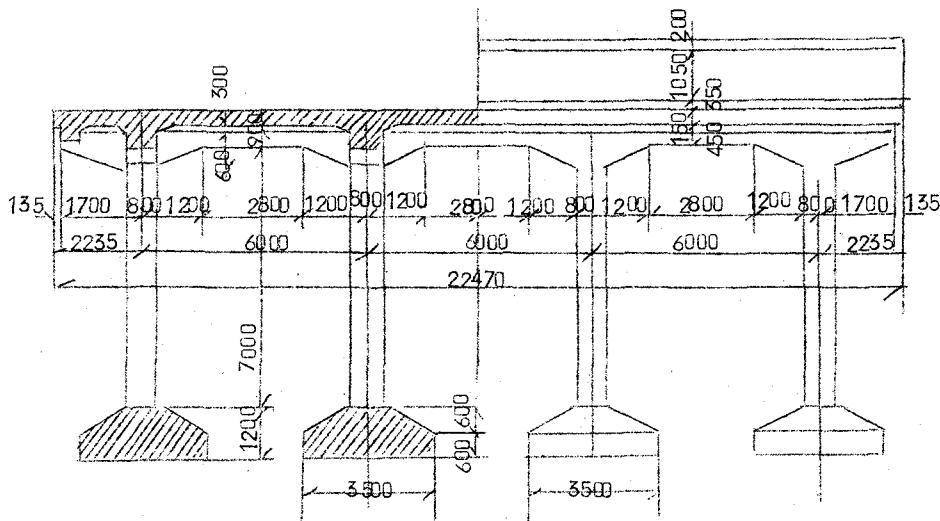


図 - 6

### 3. 40年間における鉄筋コンクリート造高架橋の軽量化

高架橋の軽量化の検討に当り、コンクリート体積を対象として、その減少過程を検討することとする。

鉄筋コンクリート造高架橋におけるコンクリート体積は、構造型式、設計方法、荷重、許容応力度、高さ、幅員、鋼材価格、地震の影響、等の設計条件によって異なるものであるが、代表的と思われる諸実例について、複線1m当たりのコンクリート体積を計算し、これを年代順にしたもののが表-3である。表-3は、約40年間における経済設計への努力が、軽量化への道を歩んでいたことを示しているものと考えられる。

表 一 五

区間	建設年度	荷重	型式	地震の影響
		スパン(m)		$m^3/m$
上野 — 神田	1919~1925	E33(KS-15)	5.4.8 2線3柱 連続版	考慮せず 1.7.3
神戸市街線(山側)	1926~1931	KS-18	5.5 2線2柱 連続版	" 1.5.2
お茶の水 — 両国	1930~1932	KS-15	5.5 2線箱型ラーメン 単純版	水平震度0.2 1.4.5
大阪 — 上淀	1933~1934	KS-18	5.5 2線3柱 3スパンラーメン 単純版	" 1.3.3
神戸市街線(海側)	1934~1937	KS-18	5.5 2線2柱 5スパンラーメン 単純版	" 1.4.3
東京 — 浜松町	1936~1942	KS-18	5.0 2線3柱 5スパンラーメン	" 1.3.2
東京 — 神田	1949~1951	KS-18	6.5 2線3柱 4スパンラーメン	" 1.3.0
大阪環状線	1956~	KS-18	6.0 2線2柱持出梁つき3スパンラーメン	水平震度0.3 1.0.8
中央線(名古屋)	1957~	KS-18	6.0 2線2柱持出梁つき3スパンラーメン	" 1.0.8

#### 4. ラーメン構造高架橋における各部断面の変遷

国鉄における高架橋は、前述のように、ラーメン構造の高架橋が大部分を占めているので、ラーメン構造の高架橋を対象に、各部断面の変遷を検討する。

ラーメン構造の高架橋をスラブ・柱・基礎の3部分にわけて、コンクリート体積の比率を求める、大体つぎのようになる。

スラブ部分(はりを含む)	60%
柱部分	15%
基礎部分	25%

基礎部分のコンクリート体積は、地盤支持力や基礎工によつて変動が大きいから、本項では、スラブおよび柱の断面寸法について検討することとした。

##### (1) スラブ部分

このスラブ部分には、はりを含めているが、スラブとはりとの体積比は7:3程度であるから、高架橋の軽量化を図るには、スラブを薄くするのが最も有効であると考えられる。

###### (A) スラブ断面

土木学会制定の鉄筋コンクリート標準示方書が初めて制定された昭和6年以前に設計された高架橋のスラブは、一方向版として計算されていたため、つぎの例が示すように、相当厚く設計されていた。

表 - 4 (A)

区間	型式	スパン (m)	スラブの厚さ (cm)
上野 - 神田	2線3柱	5.4 8	37.6
お茶の水 - 両国	2線2柱	7.4	50
神戸市街線(山側)	2線2柱	5.5	40

しかし、土木学会の鉄筋コンクリート標準示方書が制定されてからは、二方向版として設計されるようになり、また、最近の改正で許容応力度の増加により、表-4 (B) のように相当薄く設計されるようになった。

表 - 4 (B)

区間	型式	スパン (m)	スラブの厚さ (cm)
東京 - 浜松町	2 線 2 柱式	5.0	30
大阪環状線	2 線 2 柱式	6.0	30
中央線(名古屋)	2 線 2 柱式	6.0	30
第二御徒町(東京)	2 線 2 柱式	6.0	25

このスラブの厚さは、荷重、許容応力度、スパン、版の固定度によつて変化するものであるが、つぎの設計条件を対象に計算すれば、スラブの厚さは許容応力度に応じて、表-5のような値となる。

設計条件 荷重 : K S - 18

スパン : 長スパン 6.5 m

短スパン 4.5 m

表 - 5

		許容応力度 ( $kg/cm^2$ )	スラブの厚さ (cm)
一向 方版	$\sigma_c = 40$	$\sigma_s = 1200$	50
	$\sigma_c = 50$	$\sigma_s = 1200$	45
二 方 向 版	$\sigma_c = 40$	$\sigma_s = 1200$	40
	$\sigma_s = 50$	$\sigma_s = 1200$	35
	$\sigma_s = 60$	$\sigma_s = 1200$	30
	$\sigma_s = 80$	$\sigma_s = 1400$	25

### (B) はり断面

はり部分のコンクリート体積は、既述のように少なく、高架橋の軽量化に大きい影響を与えるものではないが、従来の高架橋の諸実例から、はり断面を選んで年代順にならべたのが表-6である。表-6からはり断面の傾向としては、はりの高さは小さく、はりの幅は大きくなりつつあることを知ることができる。

表 - 6

区間	型式	スパン	はり高さ	はりの幅
上野 - 神田	2線3柱	5.48 <sup>m</sup> (18')	91.4 <sup>cm</sup> (3')	76.2 <sup>cm</sup> (2'6")
お茶の水 -両国	2線2柱	7.4	150	60
天王寺附近	2線2柱	6.0	100	65
神戸市街線(海側)	2線2柱	5.5	115	85
有楽町 - 浜松町	2線3柱	6.0	90	60
大阪環状線	2線2柱	6.0	90	90
中央線(名古屋)	2線2柱	6.0	90	80

## (2) 柱部分

柱部分のコンクリート体積も、高架橋で占める割合は少ない。従来の諸実例から柱断面を選んで年代順にならべたのが表-7である。表-7から柱断面の傾向としては、漸次小さくなりつつあることを知ることができる。

表 - 7

区間	型式	スパン	柱の寸法
上野 - 神田	2線3柱	5.48 <sup>m</sup> (18')	76.2 <sup>cm</sup> × 76.2 <sup>cm</sup> (2'6" × 2'6")
お茶の水 -両国	2線2柱	7.4	120 × 120
天王寺附近	2線2柱	6.0	95 × 100
神戸市街線(海側)	2線2柱	5.5	115 × 85
有楽町 - 浜松町	2線3柱	6.0	90 × 60
大阪環状線	2線2柱	6.0	80 × 80
中央線(名古屋)	2線2柱	6.0	80 × 80

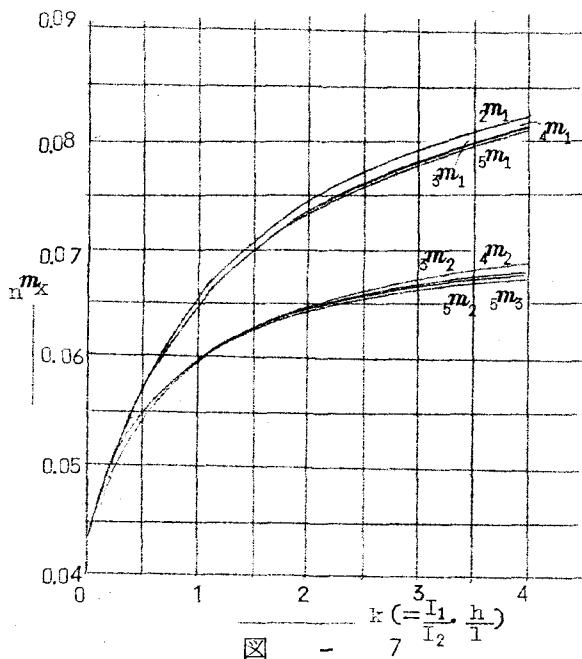
## 5. 従来のラーメン構造高架橋にたいする検討

既述のように、ラーメン構造の高架橋は、施工方法および設計方法の進歩発達により、現

在では昭和初期に比較して、0.3程度の地震係数を考えても70～80%程度軽量化されるようになつた。しかし、スパン割 断面の選定、支承構造、等を検討するとき、なお軽量化の余地があるので、ここにその大略を述べる。

### (1) スパン割

高架橋のスパン割は、5.5～6.0 m程度の等スパンとするのが普通とされているが、多スパン ラーメンはこれをスパンとすれば軽量化できるのか、等スパンとしない方が軽量化できるのか、未だ十分検討されていない。図-7は剛比が一定で、固定支承のn等スパン ラーメンのエスパンにのみ載荷した場合に、エスパンにおこるスパン モーメント  $M_{max}$  ( $= nM_x W I^2$ ) の係数  $n M_x$  の計算結果を示したものである。



## (2) 持出し ばり の長さ

ラーメン構造の高架橋は、その区画ごとの間に単純ばかりを入れたり、端柱を突合せたり、持出しばりをつけたり、している(図-8参照)。最近では持出しばりのはり長さを長くして、第1スパンのスパンモーメントの減少を図つたり、フーチングにおける偏心量を少なくして、コンクリート体積の減少化を考えて設計をしている。しかし、持出しばりを余り長くするとタワミが大きくなり、軌道に不陸をおこすおそれがあるので、高架橋において普通採用されているようなはり断面を対象とするとき、持出しばりの長さは、運転保守上、2.0m程度とするのが安全であると考えられている。

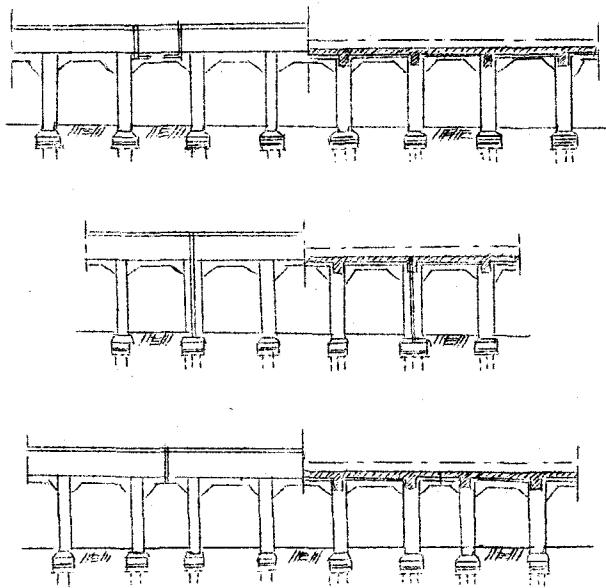


図 - 8

## (3) 剛比および断面の選定

ラーメン構造の高架橋において、剛比を適当にとらなければならないことは知られているが、どの程度にとつてよいかは明らかにされていない。これがため、剛比は設計者の勘感によつて選定されている場合が多い。筆者の経験によれば高架橋の剛比( $= \frac{\text{はりの断面二次モーメント} \times \text{柱の高さ}}{\text{柱の断面二次モーメント} \times \text{はりのスパン}}$ )は、荷重によつてその傾向を異にするけれども、2.0以下とするのが適当であると考えている。この剛比選定に当り、はりと柱の

断面二次モーメントの増減の比が一定の場合には、剛比の値には変化は見られない。従つて高架橋を軽量化するためには、部材断面が最小となるように設計しなければならない。たとえば、3スパン ラーメン高架橋のはり断面として図-9(a), (b), (c) の三つの場合を対象に、高さ6m、スパン6m、柱断面90cm×90cm として、剛比kおよびKS-1.8によつて第1スパンにおけるスパンモーメントを求めるとき、つきのような結果が得られる。

$$(a) \text{の場合} \quad k = 1.165 \quad M = 63.5 \text{ ton}$$

$$(b) \text{の場合} \quad k = 2.098 \quad M = 70.1 \text{ ton}$$

$$(c) \text{の場合} \quad k = 0.786 \quad M = 57.1 \text{ ton}$$

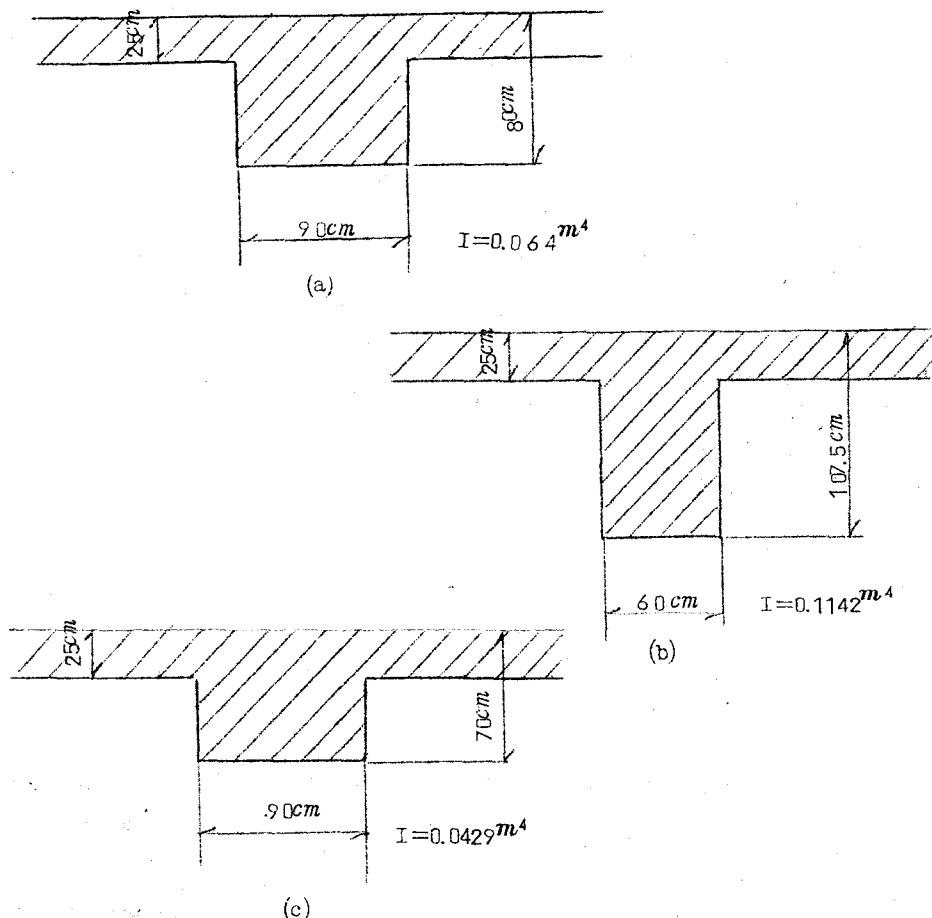


図 - 9

(c)のように、断面二次モーメントが小さくなるように、断面を選定し、剛比を小さくすれば、高架橋の軽量化にたいして有効であると考えられる。しかし、はり断面を小さく選定することが、水平荷重、温度変化およびコンクリートの乾燥収縮の影響にたいし、効果的であるか、どうかは別に検討しなければならない。

n等スパン ラーメンの高架橋において、1スパン当たり水平荷重Pをうけるとき、はり断面が小さくて剛比が小さいほど、

端柱上部におこる材端モーメン

トは小さくなることを図-10  
は示している。

また、n等スパン ラーメン  
が、温度変化およびコンクリー  
トの乾燥収縮の影響によって端  
柱上部におこる材端モーメント  
 $nM_{o1} \sigma'$  の係数  $nM_{o1} \sigma'$  は、剛比が  
小さいほど、スパン数の多いほど、値が  
大きくなることを図-11は示  
しているが、スパン数を多くし  
ないようにするか、つぎに示す

$nM_{o1} \sigma'$  を求める一般式

$$nM_{o1} \sigma' = nM_{o1} \sigma' \frac{EI_1 \epsilon_t}{h}$$

において；はりの断面二次モー  
メント  $I_1$  を小さく選ぶように  
するか、すれば  $nM_{o1} \sigma'$  を小さ  
くすることができるので、はり  
の断面二次モーメントを小さく  
選ぶことは高架橋の軽量化にた  
いて有効であると考えられる。

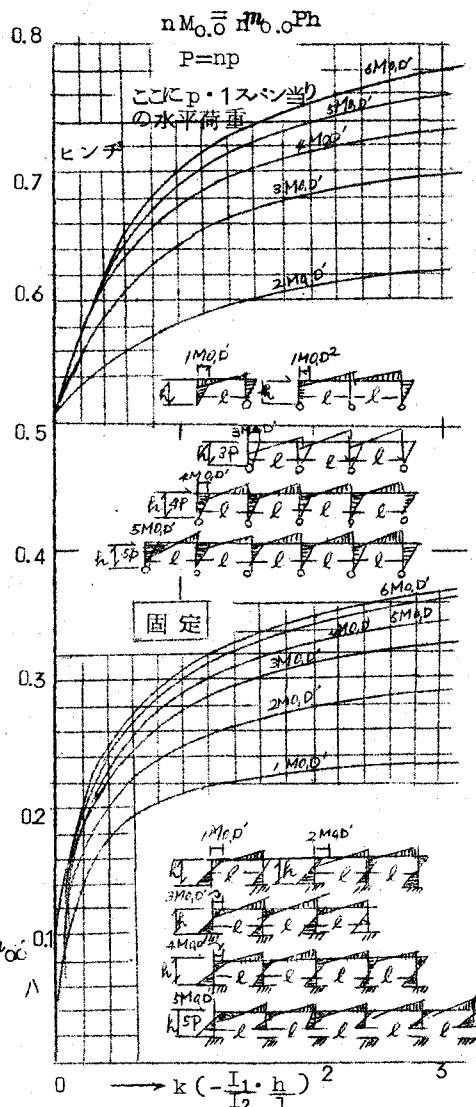


図 - 10

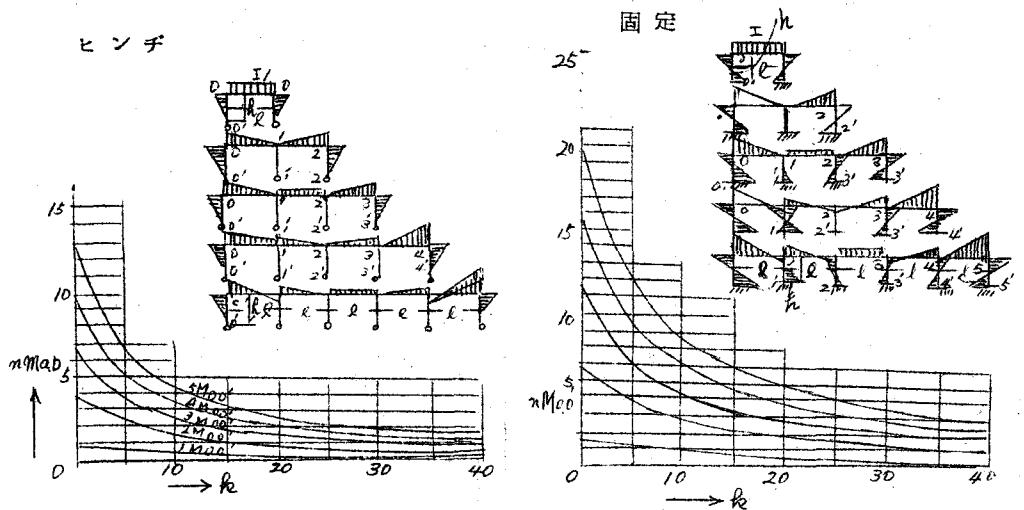
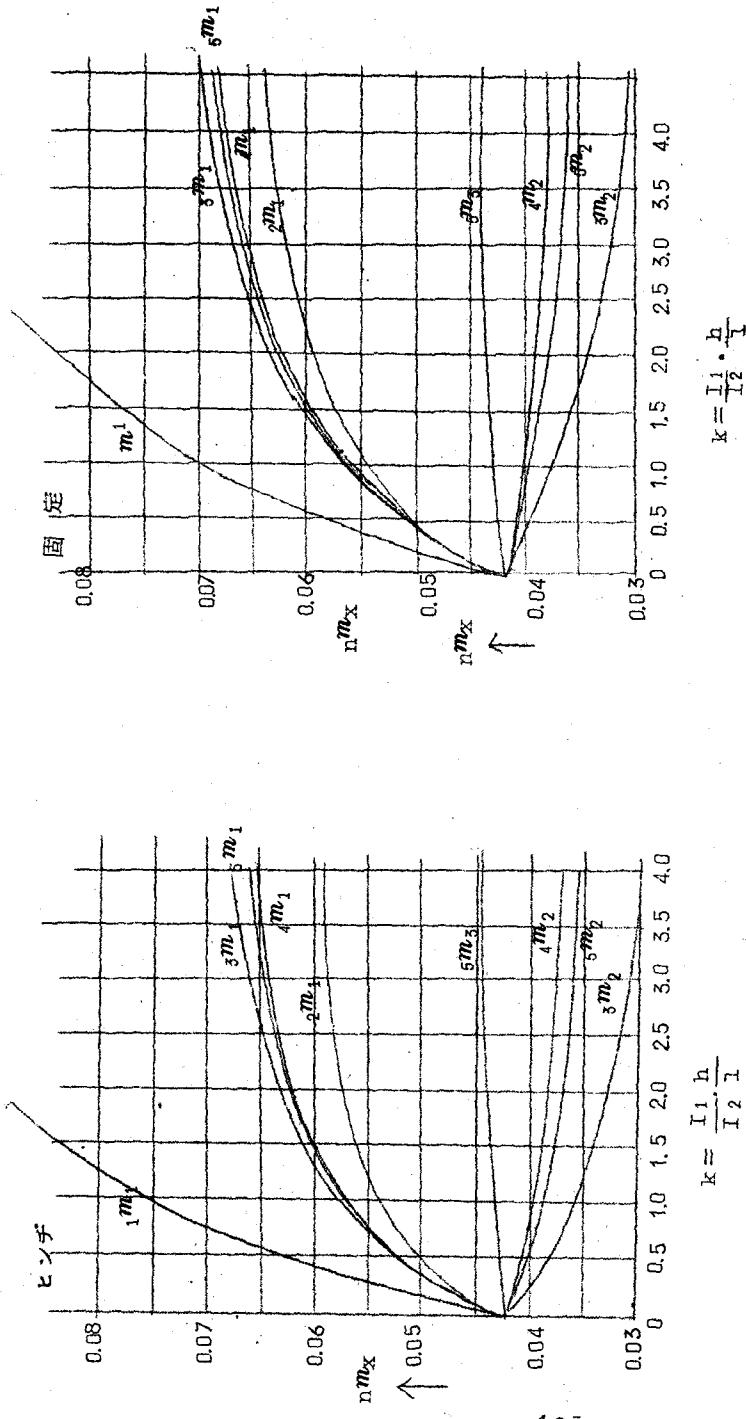


図 - 11

#### (4) 支承構造

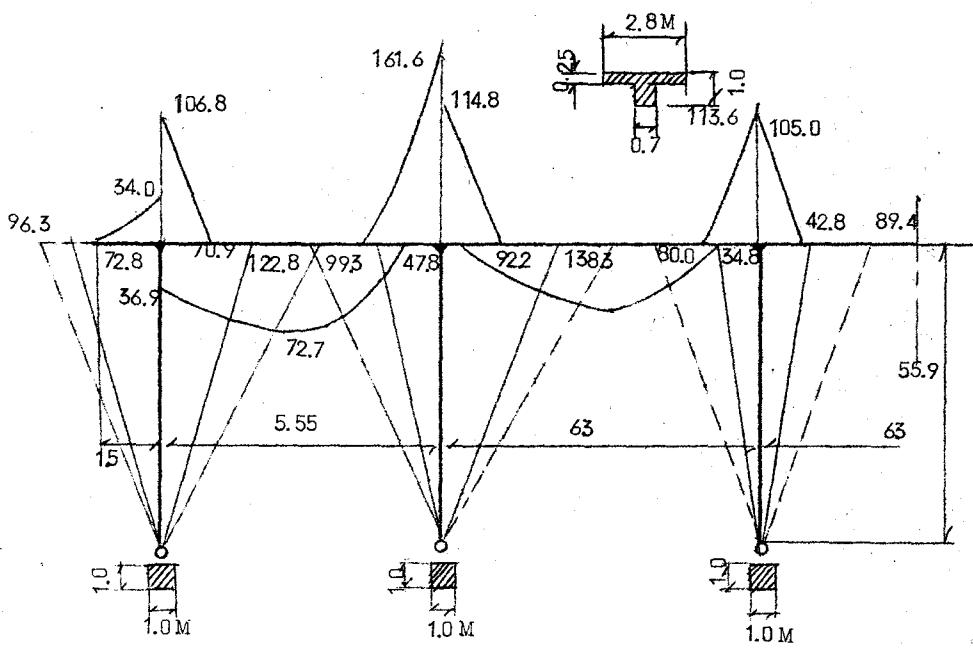
n等スパン ラーメンにおいて、等分布荷重が満載する場合のスパンモーメントは図-12が示すように、ヒンヂ支承と固定支承との間にはほとんど差異は見られないが、水平荷重にたいしては、図-10が示すように固定支承とするのが有利であり、温度変化やコンクリートの乾燥収縮にたいしては、図-11が示すようにヒンヂ支承とするのが有利である。ここに筆者は、両支承構造の長所を生かして、両端柱をヒンヂ支承、内部柱を固定支承とするのを提倡する者である。図-13は、5スパン ラーメンについて、等スパンヒンヂ支承、等スパン固定支承、等スパン両端ヒンヂ内部固定支承、両端スパンを小さく柱断面を異にした両端ヒンヂ内部固定支承、の四つの場合の最大曲げモーメントを比較したものである。



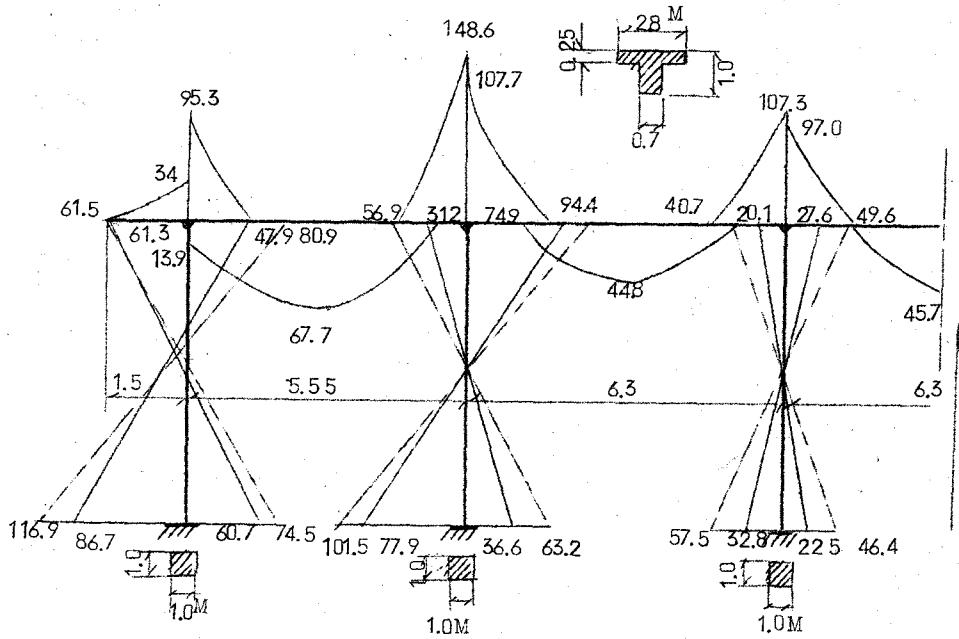
$$k = \frac{I_1}{I_2} \cdot \frac{h}{\lambda}$$

$$k = \frac{I_1}{I_2} \cdot \frac{n}{l}$$

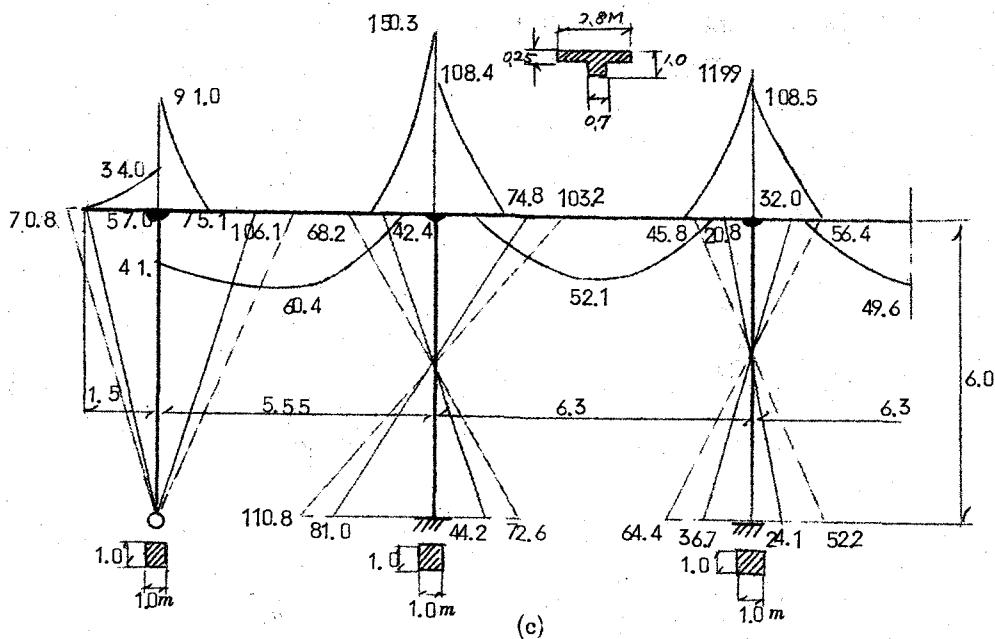
12



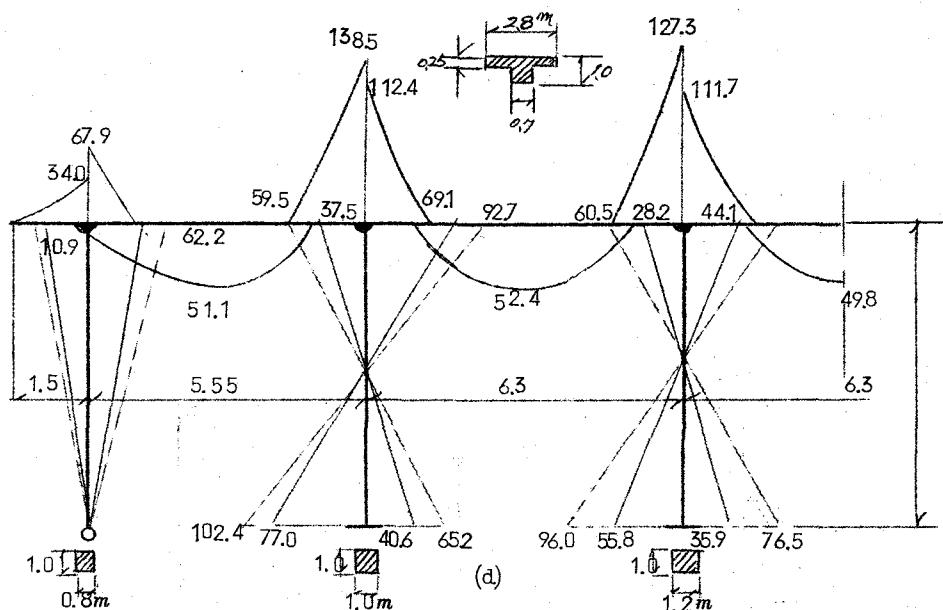
(a)



(b)



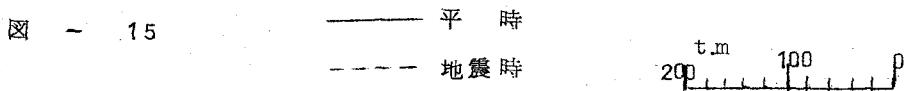
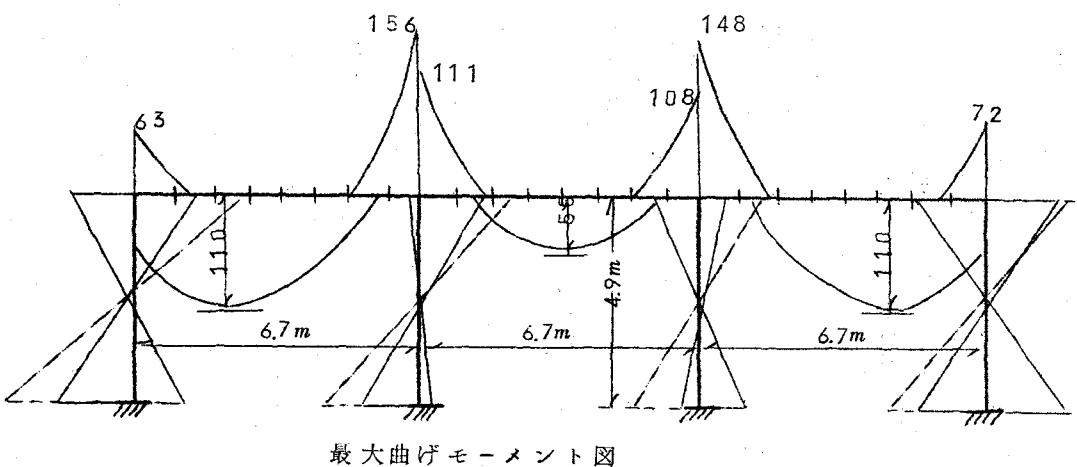
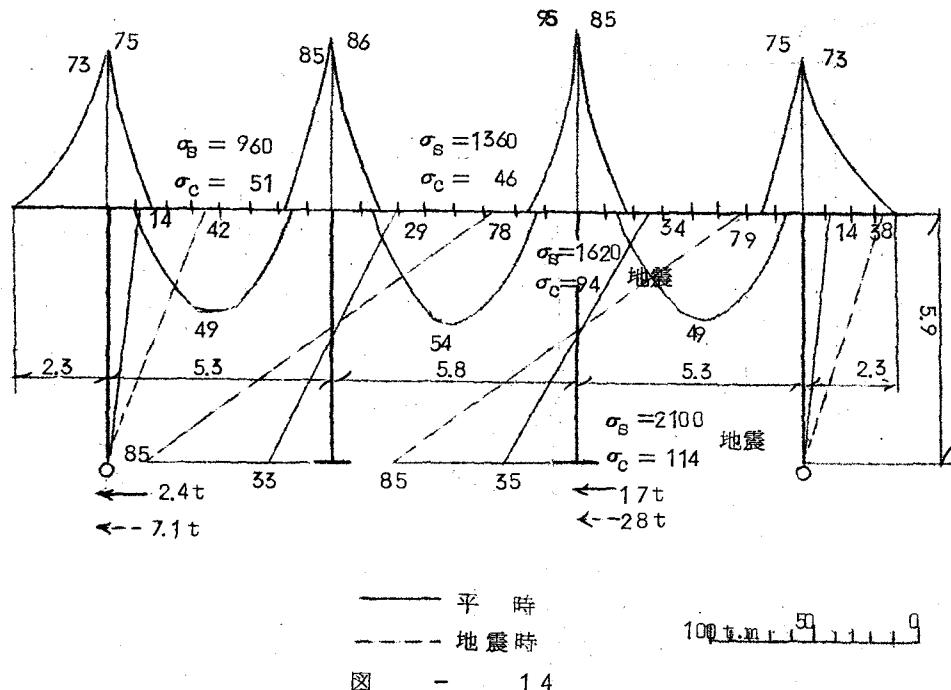
(c)

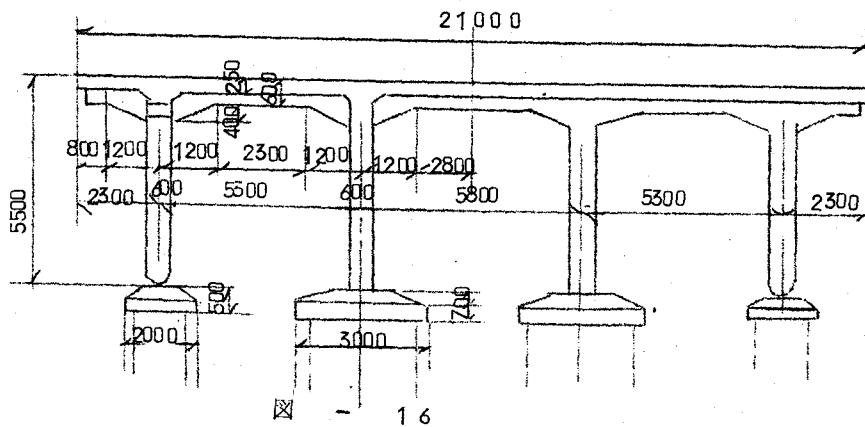


(d)

図-14は、上記の検討の結果を参考して設計した高架橋の最大曲げモーメント図であり、図-15は、1区画長を等しくして従来のように等スパン ラーメンとして設計した場合の最大曲げモーメント図である。図-14および15の複線1m当たりのコンクリート体積は $6.0\text{ m}^3/\text{m}$ および $8.9\text{ m}^3/\text{m}$ となつた。すなわち、図-15のように設計することによつて、

昭和6、7年頃のラーメン構造高架橋に比較して、コンクリート体積を50%程度に軽量化することが可能となつた。図-16は、このように設計した高架橋の概略図であるが、これを図-4、5、6と比較するとき、相当軽量化されていることを知ることができる。





## 6 結 論

ラーメン構造高架橋の軽量化を、総合して結論づければ、つぎのように考えられる。

- i 剛比一定の等スパン ラーメンとして設計すべきではなく、持出しばりを有し、各スパンの最大スパン モーメントが等しくなるようなスパン割とすべきである。
- ii 許容応力度の高い鉄筋およびコンクリートを用い、スラブは特に薄く設計すべきである。
- iii はりの断面二次モーメントはなるべく小さくなるように選定しなければならない。
- iv 剛比は、2.0以下とするのが適当と考えられる。
- v 多スパンラーメンの支承は、両端をヒンジ支承、内部を固定支承とすることが望ましい。